

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 「表記」研究に向けての可能性  |
| Author(s)    | 深澤, 愛   |
| Citation     | 語文. 2008, 91, p. 96-98  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/69124">https://hdl.handle.net/11094/69124</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「表記」研究に向けての可能性

深 澤 愛

国語学の学生と日本文学の学生とが共通のテーマで研究を行うのが今回の公開ワークショップの趣旨であるとの旨を聞いた。初の試みということであったが、有意義な試みであったと思うし、私自身いろいろ教えられるところの多い機会でもあった。その後いただいた『語文』編集委員会からの「傍聴記」執筆依頼では、質疑応答を中心にまとめよということであったが、私の漠然とした質問は議論にあまり貢献していなかったように思うので、その繰り返しは避けた。本稿は当日の質問とは多少別の内容になる。また、私の興味を中心に書記史（特に近代）にあるので、話題がそちらに片寄ることを予めお断りしておく。

さて、ある言語現象について研究を進める際に、その言語現象が日本語「史」の中でどう位置づけられるかを吟味することが重要であるのは今さら繰り返すまでもない。ただ、書記されたものを研究対象とした場合、この位置づけには非常な困難を伴うことがしばしばある。音韻や文法など言語を構成する他の要素と比べ

て、書記は個人（書記者）の自由になる部分が多いからである。ある時代のある表記を問題とすると、一見その表記が「その場の思いつき」的なものに見えてしまうこともあるのである。それを表記の多様性と片付けてしまうことは容易いが、それでは書記史を描くことはできない。一見「その場の思いつき」的な表記の奥に（おそらくは）潜む、普遍的感覚なり法則なりを抽出する作業の延長線上に、書記史の骨格は現れるはずだからである。

今回のワークショップの近代に関する発表では、表記が話題の中心であった。前述の点で、今回選ばれたテーマは難しいテーマであったと言えよう。たとえば、鳩野恵介氏の発表では、豊富な実例を挙げた上で、次の四点が「まとめ」として報告された。

(1) 明治初期は、発話者表示＋「（閉じ括弧なし）」が汎く用いられていた。

(2) 会話文末に閉じ括弧を附すようになると、様々なヴァリエーションの符号（ $\sim$ ）、 $\parallel$ （等）が濫立した（明治

中期頃。

(3) しかし会話文表示符号の主流は、明治中期以降あくまで「」か『』かであって、他の符号種はさまで浸透することなくして消滅した。

(4) 但し、閉じ括弧なしの「は、特定の場合に限って残存したようである。

(鳩野恵介(二〇〇八)『近代における会話文特立符号種の消長』平成二十年度大阪大学国語国文学会発表資料)

難しいのは、硯友社同人の作品を調査して得られた知見である(2)をどのように考えるかである。挙げられた例を一見すると、その形状の「特殊さ」に目を奪われてしまう。もしこれらの形状にだけ注目するならば、(2)は硯友社同人たちの実験的試行であり、次の時代に引き継がれることのない、突発的・一回的な現象とすることもできるかもしれない。

しかし、書記史的観点からこれを捉えるなら、形状の「特殊さ」自体はあまり意味を持たない。鳩野氏の調査によれば、硯友社同人が試みた種々の符号の多くが、閉じ括弧にあたる符号を用いている。(2)(3)によれば、これらの符号の「濫立」は会話文末に閉じ括弧を附することが広く行われるようになったことと併行しているようである。重要なのは硯友社同人が、どのような形状の符号にせよ閉じ括弧にあたる符号を附したということなのである。

(3)にあるように、「なり」なりの形状が主流となること

は、大熊智子(一九九五)「引用符を用いた会話文表記の成立」(『東京女子大学日本文学』第八四号)などの研究から考えても大方予想はつく。(『)だの〓〓だのは、たしかに形状としては垂流だろう。しかし、どのような形状にせよ「閉じる」という操作がこの時期に行われるようになったとすれば、(『)や〓〓の存在は重要な示唆を与えてくれる。すなわち、「閉じ括弧」なるものが浸透したのは、会話文を括る符号の形状そのものとは無関係だということである。どのような形状であれ、会話文から地の文への切り替えを示す符号が附されるということは、それだけ会話文から地の文への切り替え表示の認識が普遍性を持っていたことの証左に他ならない。

もっとも、このように言うためには硯友社同人の書記について、書記者自身の認識や作品における効果などがもっと綿密に考えられるべきだし、また、会話文から地の文へ切り換えるということ自体についても深く考察されなければならない。近代文学や統語論の研究(成果)の助けなくして、これらを解決することは難しいだろう。書記史以外のアプローチの研究との連繋こそが、この研究の深化の鍵なのである。

会話文と地の文をめぐる研究は、今回のワークショップの趣旨にまさに沿ったものであったと思う。ただ、残念ながら個々の調査なり考察なりの成果がそれぞれ独り歩きしているようだった印象は否めない。今後さまざまなアプローチの研究の連繋をもっと密にしていけば、このワークショップで行われたことの価値は飛

躍的にあがるだろう。今後の更なる発展が俟たれてならない。

(ふかざわ・あい 同志社大学非常勤講師)